

平成28年度学長裁量経費研究推進支援プロジェクト研究成果報告書

1. 研究の概要

プロジェクト名	小学校教員志望者の英語力と動機づけの関係		
プロジェクト期間	平成28年4月～平成29年3月		
申請代表者 (所属講座等)	Kenneth Brown (英語習得院)	共同研究者 (所属講座等)	宮迫靖静 (英語教育講座) 横尾聡子 (英語習得院)
取組方法・取組 実績の概要	<p>2016年4月初旬、英語習得院はELI講座の新規受講生を募集、283名が受講登録をした。</p> <p>同月下旬、受講生のクラス分け、および6段階からなるプログレス(習熟度)テストにおける各受講生の受検レベルを決定するため、プレイスメントテストを実施、5月初旬には初回プログレステスト(プレテスト)を実施した。さらに、講座の第一週目、同受講生を対象に、67項目からなる6段階リッカートスケールを用いた英語学習に対するモチベーション調査を行った。1授業60分、週2回、10週(計20時間)からなる前期講座を終了後に2回目のモチベーション調査を、さらに同じく計20時間からなる後期講座終了後に3回目の調査を同受講生に対して行った。同時に、前期・後期合わせて40時間(受講生の出席率を100%と仮定した場合)の講座を終了したことにより、2017年1月下旬に2回目のプログレステスト(ポストテスト)を実施した。</p> <p>以上の準備を経て、ELI講座新規受講生を対象にしたプログレステストのプレテストとポストテストのスコア、モチベーション調査、および授業出席率に関するデータが出揃い、これらの関係性を分析することが可能となった。</p>		
研究成果の 概要	<p>プレイスメントテストと初回プログレステスト(プレテスト)の結果はともに、受講生の大多数がCEFRのA2または上位A1レベルであることを示している。</p> <p>また、これら2つのテストは、「読む、書く、聞く、話す」の4技能における受講生の平均スコアが、技能別に見て大差がないことも示している。このことは、よく言われる「日本の学生は英語の読み書きの能力は高いが、聞く・話す能力は低い」という認識が誤りであることのエヴィデンスであり、さらには英語の教授法・学習法における「4技能」アプローチの信頼性への裏付けになるとも言える。</p> <p>初回プログレステスト(プレテスト)と2回目のプログレステスト(ポストテスト)との比較では、英語力の伸びが確認された受講生はごく少数に留まる結果となった。これは、英語学習時間の増加に対する必要性を強く示唆するものであり、ELI講座だけでは(手助けになっていることは間違いないものの)十分ではないことを明確に示している。</p> <p>また、受講生の受講開始前の英語力と講座出席率との関係に目立った関連性は見られないことから、英語力がもともと低い受講生でも高いモチベーションをもつことは可能であるが、それと同時に、英語力が高い受講生でもモチベーションは低い場合もあるとも言える。</p> <p>ELI講座における総体的に低い出席率が示唆するものは、極めてモチベーションの高い受講生を除き、課外における英語プログラムが全ての受講生に対して効果的であるわけではない、ということである。</p> <p>また、スコアの伸びと出席率の関係性の低さは、ELI講座以外の要因がより大きく受講生の英語力の伸びに関係していることを示している。</p>		
外部資金獲得申請及び研究成果の公表方法等について〔 <input type="checkbox"/> (該当事項) にチェック方願います。〕			
外部資金獲得 申請(予定)	<input checked="" type="checkbox"/> 科学研究費補助金 <input type="checkbox"/> 受託研究費 <input type="checkbox"/> その他 ( )	研究成果の 公表方法 (予定)	<input type="checkbox"/> 学会(国内・国外): <input type="checkbox"/> 新聞・図書・雑誌論文等: <input type="checkbox"/> その他: